

自然と人間との共生

KOSMOS

公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会



EXPO'90
FOUNDATION

こすもす
2022
春

第9号
コロナ
特集号

ウィズコロナ

文化と思想にみる
自然と人間との共生の歴史





「しんよし原なまづらひ」国際日本文化研究センター所蔵

ウィズコロナ

自然と人間との共生の視点から

前号のKOSMOS 8号では自然科学からの視点で「ポストコロナ」を見据え、環境問題などにアプローチしたが、ウィズ／ポストコロナを包括的に考えるとき、人文・社会科学からのアプローチも不可欠である。

本号では、和洋問わず、昔の人々が感染症を恐れ、敬い、対応してきた知恵と思索に注目し、対談とエッセイによる多様なメッセージを通じて、「ウィズコロナ」の生き方を考える。

災いの文化史

日本人はどのように厄災と付き合ってきたか

小松和彦

国際日本文化研究センター名誉教授
民俗学者

秋道智彌

総合地球環境学研究所名誉教授
人類学者

天災論と人災論

秋道 東日本大震災の二年か三年後頃、当時関わっていた人間文化研究機構の研究会で、今回の地震は人災か天災かという議論がありました。その時に話題として出たのが、鴨長明の『方丈記』と、日蓮の『立正安国論』でした。方丈記では、鴨長明が「これは天災だ、世の中こんなもんだ」と言っている一方で、日蓮は「けしからん鎌倉幕府は！ お前たちの失政のせ

いだ」と言っている。おそらく文治地震（一一八五年）のことでしょう。また『平家物語』には、京都で地震が起こった際に「これは平家の怨霊の仕業だ」と書いている。同じ文治地震でも、鴨長明の見方は天災論で、日蓮の見方は人災論。さらに平家物語では「祟りじゃー」と言っています。祟りといえば、小松さんの専門ですが。小松 今日奇しくも二十七年前に阪神淡路大震災が起こった日です。

昔から災害が起こると、人間は

3

対談

災いの文化史

日本人はどのように厄災と付き合ってきたか

小松和彦

秋道智彌

13

ウィズコロナ六つのメッセージ

自然と人間との共生の視点から

14 天平の天然痘禍

平城京の疫病対策

神野恵

17 災害や感染症が

明治維新にもたらした影響

河合敦

20 西洋文学にみる感染症

小倉孝誠

23 コロナ禍は祭りをどう変えたか

青森ねぶた祭の中止と存続

阿南透

26 健康になれる都市環境の構築

久野譜也

29 緑の役割の再発見

ネイチャー・ポジティブにむけて

森本幸裕



「あら嬉し大安日にゆり直す」(上右)、「じしん百万遍」(上左)、「金持をゆすりにきたか大地しん」 国際日本文化研究センター所蔵



ズが怒って動き、大地が揺れたのだという俗信が広まった。その化け物ナマズは、ふだんは鹿島の神が要石で押さえつけているのですが、ちょうどその地震があったの

は十月(神無月)だったのです。秋道 神様が出雲に行つて不在の時だ！ 小松 その隙をみてナマズが暴れた。この俗信を江戸の人たちがどこまで信じていたかはわかりませんが、それをモチーフに絵を描いて販売したところ、もの凄く売れた。無許可で出版したので取締まりを受けたにも拘わらず一か月で百種類以上出たようです。二〇二

一年の夏に、国立歴史民俗博物館で鯰絵の展示会が行われ、図録も出ていますが、その絵の半分以上が、大ナマズをもじって世相を描いているのです。最初は、ナマズが動いたけれど鹿島の神が押さええているから安心しなさいという、お札のようなものですが、少し落ち着いてくるとナマズを中心に百万遍のように取り囲んで死んだ人を供養する絵になってくる。その次にはナマズが金持ちを懲らしめて体やお尻から小判を出させている絵が登場したり、クジラが小判を吹き上げていたり、地震で大儲けした左官や大工たちがナマズを呼んで接待しているような風刺もあります。

秋道 面白いですね。

小松 当時の人は地震ナマズだとすぐにわかるから、地震で困っている人がいる一方で儲けている人もいることを、ナマズを使って上手く批判している。

東京大学地震研究所が出しているような、地震によって倒壊した建物の数、死者の数など、数値が

伝える自然科学としての記録はきわめてそつけない。ところが鯰絵からは、地震に遭遇した当時の人の願いや世相、対応の仕方が伝わってきます。そしてその生きた感覚を今の私たちも楽しむことができる。まだ記憶に新しい阪神淡路や東日本の大震災も、時間とともに知らない人が増えていく中で、過去の災害の歴史をどう伝えていくかが重要なのです。鯰絵は当時の様子を百年後、二百年後の人に伝えるために描かれたものではないけれど、その時代の感覚を、我々に生き生きと伝えてくれるのです。

秋道 江戸末期の大衆があれば、たくさん版を作るといえるのは、すごい能力ですね。いって見れば出版社あるいは新聞社。黒船が来た時には、ナマズとペリー提督が綱引きしている絵が出てきますね。そうやって次々と鯰絵を、当時起きた別の事象にも繋げていく。現代のコロナ禍もまた、それが巻き起こす貧困や差別、いろいろな事件があるけれど、そういう事件が



海嘯碑(岩手県大槌町) 碑文には「過ぎにし明治二十九年六月十五日の夜半襲い來たりし/大海嘯は瞬時にして我が同胞六百余の精靈を/藻屑と化し人家五百六十余戸を奪い去りたる/光景其の凄惨譬うる物なし噫/一声は千々の涙や吐血鳥/雪叟」とある 写真:佐々木健

とかくその原因を説明しようとしません。しかし、天であつても、人間の怨霊であつても、両方を明確に分けることはできない。地震や津波が起きた時、その被害の責任を転嫁するため、あるいはその現象を説明する装置として、いろいろな解釈が出てくるのです。天の制裁とか神仏の祟りだという人もいるし、人災だという人もいます。つまり災害をどのように受け止めるかということですね。人間は起

きたことをそのままには放置できないのです。 天災論については時代によって解釈が異なります。天による制裁だという昔の天災論に対して、自然の摂理の中で起きた現象だという理科系的な諦めが今の天災論です。同じ天災論でも、この二つは区別をしないとイケません。現代は地震の原因に一切、信仰的なものは入れずに科学的に説明し、地震自体は人間が関与するものではないという考え方で。 一方、現代の人災論は、原発をその場所に建てたために被害を受けたというような考え方です。これは政治が悪かったからだという地震によって生じたことへの批判で、地震それ自体の原因についてはありません。秋道さんは、岩手県の大槌町で調査されていますが、あの一帯は五十年前あるいは百年前にも同じ災害を受けていて、人々は丘の上に住まないとまた津波が来ると知っている。しかし、漁業をするには海辺で仕事しない

と生きていけないのですね。 **秋道** あの辺りには、ここから上に住まないと津波が来ると警告した石碑がいくつもあります。津波のことを「海嘯」と記した碑文から、明治や昭和に津波がきた時のことが分かります。明治二十九年(一八九六)の大津波では、運悪くその日は日清戦争に勝つたお祝いや旧暦の節句で、みんなで浜に集まっていた。万歳を唱えながら花火を打ち上げ、地震が来ても祭りの雰囲気のままに浜にるところを津波が襲った。これは天災です

が、人災に近いかもしれません。 **鯰絵が語る 震災時の世相** **秋道** 天災か人災かについて考える際に、興味深い過去の記録として、「鯰絵」がありますね。 **小松** 安政二年(一八五五)に江戸で起きた直下型地震での時のことです。当時の江戸の人口は約百万人ですが、ほとんどが木造の長屋に住んでいて、一人人ほどが亡くなったといえます。直後に人々の間で、地下に住んでいる大ナマ



小松和彦(こまつ・かずひこ) 1947年東京都生まれ。専門は文化人類学、民俗学。口承文芸論、妖怪論、シャーマニズム、民間信仰などの研究で知られる。2013年、紫綬褒章受章。著書に『妖怪文化入門』『呪いと日本人』『異界と日本人』(角川ソフィア文庫)など多数。

コロナ禍と一緒に語られていない。過去の災害や同時代の世相を伝える手法として、鯨絵の話はとても興味深いですね。

小松 鯨絵を見ると、現代のほうが報道規制が大きいと思う。江戸時代はもっと自由です。捕まっても大したことはない、手鎖(てづか)も何日で解放されるとわかっていいますから。だから幕府に対する批判もできるし、金持ちに対する風刺もできる。それから困っている人のことも、儲かっている人のことも描ける。現代は果たしてどうでしょう、疑問を感じますね。

日本各地に残る伝承や記録

小松 ナマズと要石の信仰は中世頃からあって、関西では琵琶湖に浮かぶ竹生島(たけなま)に要石があり、弁財天がそれを押さえているといわれています。一方、弘化四年(一八四七)に、信州で起きた地震の時には、善光寺の阿弥陀様が怒っているという内容の絵が出てきます。江戸の安政地震の前後、各地で地

震が頻発するのですが、上方の大坂では瓦版にその記録が見られます。これは風刺というよりは、何軒潰れたとか、火事の様子などがどうであったという内容で、とにかく記録的。唯一、津波の時に、沖のほうに海坊主のようなものが現れたという記述がありますが、江戸と大坂の街の性格の違いだと思います。

秋道 災害に関する伝承は、全国にいろいろあります。ナマズのようにはビジュアル系ではないけれど、たとえば明和八年(一七七二)に、沖繩で起こった津波に際しては、次のような話が伝わっています。ある日、三人の漁師が漁をしていて、ザン(ジュゴン)が網に捕まった。そして人間の言葉で「私を逃がしてくれたら重要なことを教えます」と言う。漁師たちが相談して、逃がしてやることにすると、ジュゴンは「明日、ナンが来ます」と教えてくれる。ナンとは津波のこと、本当に起こっています。このような予言伝説は宮古



富士浅間神社の鳥居越しに富士山を望む 写真：堀内亨

から八重山あたりに点在しており、いわゆる予言獣、フォーチュネラーの存在として知られています。それからもう一つ、さきほどの人災論にも繋がりますが、貞観六年(八六四)に富士山の側火山が噴火した。その時に京都の朝廷が占うと、神社の権禰宜(ごんねぎ)や祝(はゆり)で人民が苦しんでいるから、富士山の神を祀りなさいとご神託が出る。それでできたのが富士山の女神様、木花佐久夜毘売(きはなさくやひめ)を祀る浅間神社です。地震、噴火、津波など

は、近代からみると天災ですが、昔の人は誰かが何かをしたから災いがもたらされたという考えかたをしていたことが、こういう伝承から読み取れます。

伝染病との闘いの歴史

秋道 地震、津波などの天災とは別に、天然痘(ばらばら)、ペスト、梅毒、インフルエンザなど、病氣と日本人がどのように付き合ってきたかの歴史もまた興味深いですね。**小松** 日本の文献上もとても古い病氣は天然痘で、『日本書紀』に出ています。有名なのは奈良時代、律令国家を支えた藤原四兄弟が次々と天然痘にかかって死んでしまい、世の中の混乱を招いたという話で、九州太宰府から各地に伝播し、全国で猛威を振ったという記録があります。奈良時代に続く平安時代、そしてつい最近まで、天然痘は日本人を悩ませてきた病で、平安時代には、紫式部の夫や和泉式部の恋人である敦道親王などが、天然痘で死んでいる。

江戸時代には天然痘は現在のインフルエンザのように当たり前になり、子供が罹ってもそれを乗り越えて免疫ができると生き残れる、通過儀礼のようになっていた。疱瘡(かぶ)はつい最近、我々の子供の頃でも恐れられていましたね。

秋道 北海道の国立アイヌ民族博物館の永野正宏氏の研究¹によると、十九世紀前半にアイヌの人口が減少しており、その原因は海の交易によって天然痘が蝦夷地にもたらされたこと。しかし、アイヌの人たちには感染症の流行時には「山に逃げる」という習慣があった。蝦夷地を治めていた幕府(松前藩)は、一八一七年の天然痘の流行時にはアイヌ、すなわち労働力の減少を避けるため、この習慣を奨励したといえます。山に逃げることは、都市的な環境だと感染が広がるので、理にかなっている。

また九州の五島列島や長崎の一帯では、海外から来る人がさまざまな病を持ち込む。その時には無人の離島に逃げる、あるいは離島

に病氣の人を隔離する。これはハセン病に関しての日本政府のやり方と似ています。**小松** 日本の場合、伝染病は海から入ってくる。天然痘も仏教とともに大陸から伝わるのですが、このことでもいつも思いつく作品が、吉村昭の『破船』という小説です。日本海側にある離島の集落の話で、その村では浦に難破船が漂着したら、船の乗組員を殺し、積んである米などを奪い、船それ自体も薪にして燃やして証拠を消してしまふ。難破船は彼らにとっては宝船

だった。しかしある時、真っ赤な帆を掲げた、つまり疱瘡の病人を乗せた船が流れてきて、迷った末、村に上げてしまふ。疫病は瞬く間に広がり、村人のほとんどが死んでしまふ。つまり海からは宝も来るけど、災いも来るといふこと。大昔からそうです。江戸時代に流行したコレラは、出島に入ったオランダ船の船員から長崎に上陸し、あっという間に江戸まで来てしまふ。おそらく船は良いものを運んできたと思う。しかし同時に負のものを

運んでくる。現代のコロナ禍も過剰なクローバリーゼーションがもたらしたもので、こういうメカニズムは時代を経ても変わっていないのです。

秋道 天然痘も厄介で、ダニを媒介して伝染する。それが撲滅できない理由です。ペストも同じで隔離できない。中世のヨーロッパでは、騎馬民族が宿営地を各地で営むと、その食料を目当てにペスト菌をもったネズミが紛れ込み、今度はノミが人間に感染させる。そこで一三七七年に施設を作り、ダイヤモンド・プリンセス号で隔離したように、船の入港を禁止して四十日間停泊させて隔離し、ヴェネツィアに入れないようにした。隔離期間は新型コロナウィルスだと二週間、オミクロンで十日などといっているけれど、この措置は四十日間でした。クアランティン(検疫)という言葉の語源は、イタリア語の四十日間からきているのです。中世のヨーロッパ人も船は危ないと分かっている隔離をして様子を見た。



秋道智彌 (あきみち・ともや)

1946年京都市生まれ。専門は生態人類学。国立民族学博物館、総合研究大学院大学、総合地球環境学研究所などで教授を歴任。現在、山梨県立富士山世界遺産センター所長。著書に『明治～昭和前期漁業権の研究と資料』『海とヒトの関係学4 疫病と海』など多数。



到着した連絡船に集まる人々（ミクロネシア、サタワヌ島）国立民族学博物館所蔵

小松 病気が出ると、乗員ごと船を燃やしたりもしますね。
秋道 伊豆諸島に難破した船は酒樽を積んでいることがあったので、その場で略奪されたといえます。歴史の中ではそんな話はいっぱいある。海からの漂着といえ、柳田國男が二十歳過ぎの頃、渥美半島の先端、伊良湖岬で静養中に、海岸で見つけたヤシの実の話が思い出されます。のちに島崎藤村が

詩「椰子の実」に読んで有名になった。こうした漂着物は、叙情的な歌を生み出す一方で、さきほどの難破船と同じように厄をもたらす可能性もある。流れ着いたものに触れると誰かが死ぬという考えは、鹿児島島の沖永良部や徳之島あたりにも残っていて、「名も知らぬ遠き島より」海を越えて変なもの came たら、家の中に持って入ってはいけません。
小松 外部からやって来るものは両義的なんですね。
秋道 これまでの議論から、天災と人災は分けられないという道筋がわかってきました。二元論的に考えてはいけません。さらに天災の意味は時代で変化してきています。小松さんの話を聞いていると、天とか人とか、良いとか悪いとか、そのような単純なことではなく、すべて関わりがある。なるほどと思いますね。
小松 すべてのことが裏表ですね。言葉だけで表現すると、「良いものが来ましたが、悪いものが来ました」と、ものすごく対立した感じ

つてきた病で、「三日ころり」といわれたように発症してから死ぬのが早い。この病気は「虎狼狐」という、虎・狼・狐が合体したような妖怪が根源とも言われました。病に対処する方法を記した「疱瘡絵」や「麻疹絵」というものがある。そこにはこうしなさい、あしなさいと、処方箋のようなことが書かれています。コレラはあまりに死に至るのが早かったため、そういう処方箋的な「コレラ絵」がないのです。明治になってから、石灰などを撒いて消毒する方法が入り、ようやくその頃の絵が何枚かあるくらい。コレラに関する絵といえば、人が次々と死んでゆくので火葬が間に合わず、火葬場の前にブラツと棺桶が並んでいるという絵があります。また江戸の人はコレラのことを狂歌に詠んだりしているのですが「昨日かかあが死んで、今日は息子が死んだ」というようなことを平気で書いています。
秋道 コレラはもともとインドの風土病で、それが船の往来であっ

がします。しかし、現実的にはそれらは隣り合わせで、だからこその怖いです。

鎖国がグローバルか

秋道 彫刻家であり民俗学者でもあった土方久功は、ミクロネシアのサタワヌ島で原住民と生活をともしながら作品を制作した人です。彼は日誌に、「あ、船が来た。数日内にまた何人が死ぬな」などと記している。日本船が島にインフルエンザなどを持ってくるからです。島では「流行り病」のことをメサヌピクと呼ぶ。メサヌは「前」「ピク」は砂浜という意味ですが、砂浜の前から悪霊、つまり疫病が入ってくるので、通路を作

ってヤシの若い葉っぱを敷き詰めて、悪いものが入らないようにするのです。
小松 日本でいえば、しめ縄のような結果。
秋道 そう、結界装置を作る。そのスケッチが土方の本にも出てきます。
小松 結局、鎖国が功を奏している。平安時代は遣唐使をやめることで、国風文化といわれる独自の文化が芽生えた。中世に入ると、平清盛や足利家は中国の宋と交易していたし、足利の勢力が及ばなくなると、大内氏などが勝手に貿易をしていた。その後、南蛮文化が入って来るのですが、もし近世の日本が鎖国をせずに、キリシタンの文化がもつと入っていたら、



「お犬様」(ニホンオオカミ)を厄除けの神様と崇める御嶽神社の御札

江戸時代に円熟をみせた日本の文化はどうなっていたでしょう。早いうちに列強の植民地になったかもしれない。そういう風に考えると、グローバルゼーションというのは必ずしも良いともいえず、むしろ危険かもしれない。海外からもたらされる病気もまた、将棋倒しのようにあっという間に広がります。それは現代も同じでこの頃のスピードには驚きます、負のスピードの典型です。
秋道 感染症は身分の違いにかかわらず、だれでも同じようにうつる。グローバルゼーションは格差を拡大するけれど、それとは違っている意味平等です。このコロナ禍は、まさにグローバルな世界のマイナス面を反映していますが、この先プラスに転化できないものかと思っています。
オオカミ、薬草など、自然の恵みから
秋道 コレラの流行では鯨絵のようなものが出てきましたか。
小松 コレラは幕末頃に日本に入

つてきた病で、「三日ころり」といわれたように発症してから死ぬのが早い。この病気は「虎狼狐」という、虎・狼・狐が合体したような妖怪が根源とも言われました。病に対処する方法を記した「疱瘡絵」や「麻疹絵」というものがある。そこにはこうしなさい、あしなさいと、処方箋のようなことが書かれています。コレラはあまりに死に至るのが早かったため、そういう処方箋的な「コレラ絵」がないのです。明治になってから、石灰などを撒いて消毒する方法が入り、ようやくその頃の絵が何枚かあるくらい。コレラに関する絵といえば、人が次々と死んでゆくので火葬が間に合わず、火葬場の前にブラツと棺桶が並んでいるという絵があります。また江戸の人はコレラのことを狂歌に詠んだりしているのですが「昨日かかあが死んで、今日は息子が死んだ」というようなことを平気で書いています。
秋道 コレラはもともとインドの風土病で、それが船の往来であっ

という間に広がった。日清戦争の頃、大陸にいた二十万人の日本兵が、戦争が終わって移送船で帰国するのですが、その多くがコレラに罹っていて、山口県の関門海峡の近くにある彦島、広島県の似島、大阪の桜島などに隔離されたそうです。今の新型コロナと同じやり方で、まず陰性陽性を調べて、陽性だったら島で隔離。着ている服も危ないので処分した。似島で検査を統括したのが後藤新平です。
小松 江戸時代の駿河で行われた祈禱の例ですが、最初は民俗的なご祈禱をし、効かなかったらもう少し上の高神の駿河の三嶋大社に行く。それでも効かない時は二つ選択肢がある。一つは京都の吉田神社で、吉田神社の神様を勧誘してきて神社を建てて祈れば、コレラを退治できる。もう一つは武州の御嶽山で「狐落とし」で有名ですが、お犬様で落とす。そこでお犬様を呼んでくればいんじやないかと、わざわざ静岡から奥多摩までお札をもらいに行ったり、本当の犬をもらってきたという話も



中国茶房「好日居」(京都市左京区岡崎)の一室にて。対談は、偶然にも27年前に阪神淡路大震災が起きた日に行われた

分布が変わってきています。マラリアがその一例で、気温が上がることで日本にも媒介する蚊がやってくる。コロナだけを騒いでいるけれど、そのほかにも媒介するネズミや蚊などの伝染病の拡散の可能性がある。先ほど小松さんが言ったように、今日本の国土は荒れているから、本当に怖いです。

グローバル時代の共生とは

小松 アマビエチャレンジは、いってみれば鯨絵の復活みたいなものですね。幕末頃に外国船が出て来て日本の沿岸を徘徊するようになると、海から変な動物が採れるようになったという。青森の津軽藩の歴史の中でも、宝暦年間（一七五一〜六四）頃に、漁師が変な生き物を捕まえた記録があります。女魚と呼ばれている顔だけが女の人の、いわゆる典型的な人魚系で、体は魚。まさにアマビエなどにながっていきような絵が載っている。そしてその魚や獣が、人々に対して悪病が流行するなど喋る

のです。そういう流れの中でアマビエが出てくる。アマビエ自体は天彦が訛つたとされ、彦ですから男ですが。そういう変なものが海からやってくるというのは不安な時代を反映しているからで、黒船とも関係があるかもしれない。国内的には飢饉が起こって、世の中がすさみ、やがて疫病が流行ります。すると今度はそういう獣が「豊作になります」と、飢饉の後に期待を持たせるようなことを喋るようになるのです。



『肥後国海中の怪（アマビエの図）』1846年に刊行された木版画、京都大学附属図書館所蔵
肥後国で夜ごとに海に光り物が起こったため、土地の役人がおもむいたところ、アマビエと名乗るものが出現し、役人に「当年より6ヶ年の間諸国で豊作がつづくが、同時に疫病が流行するから、私の姿を描き写した絵を人々に早々に早々に見せよ」と予言めいたことを告げ、海の中へと帰って行ったとある

面白いのには江戸時代の人たちはそういうことを書き留めていて、親父さんの日記でありましたとか、瓦版で見たので書き写しましたとか記録を残しているのです。先ほどの鯨絵も、本当に全部信じていたらご祈禱で終わってしまうけれども、そうではなく鯨絵を使っているようなことが、現代のアマビエチャレンジのような現象にも見られる。アマビエは最初に京都の妖怪掛軸屋さんが、ネットにあげて話題になったのですが、疫病が流



白熱した対談を潤す「柚子と黒文字の茶」。いずれも古より薬として用いられてきた植物を、下御霊神社の「御霊水」でゆっくりと香り出したもの。御霊水は江戸時代、京都の町が干ばつに見舞われた際に湧き出たとされる地下水

あつて、そのためにニホンオオカミが絶滅したという説もあります。
秋道 お守りにするのですね。よくいう眷属信仰。

小松 犬の首を祀ると狐が逃げると信じられていて、関東・東海にはオオカミの首を持っている人が結構いるのですよ。

秋道 オオカミって「大きな神」ですね。

小松 だから大神信仰だった。たんにお札だという説もありますが、あちらこちらに首が残っていて、私も見せてもらったことがあります。自然環境にすごく影響を与えたと思います。

秋道 絶滅の原因ですね。山伏にしても御師にしても民間信仰で、眷属信仰のようなものがわつと広がった。そういえば東北の山の中にいる獵師のマタギの習慣で、焚き火をする時にオオシラビソを燃やす。オオシラビソは高地の針葉樹で、岩手山、富士山、乗鞍など三千メートルクラスの高地にしか生えないのですが、焚くといいい香りがする。そのオオシラビソが、マタギの家の神棚にかざってあるのです。
小松 匂いですね。悪霊を追い払うためには香を焚く、護摩です。あれも基本的には匂いで追い払う

という考えで、香を身体に塗ったりもします。ただ漢方はどこまで効いたのかを判断するのが難しい。麻疹絵などにも子供に効くと書いてあるけれど、さてどこまで効くかわからない。
秋道 享保年間以降、幕府が薬の探索と採取を目的に「採薬使」を全国に派遣し、その記録が『採薬記』という書物に残されています。それまでは中国産の薬種を使っていたのが、国内で調達しようとしていた。現代のコロナでは、葉草の有効性を探るといようなことは無い。今の日本の医療はもっと多面的な研究開発を行うべきです。コロナがもとも出て来たのは中国の武漢ですが、雲南省の山間部にはタケネズミという大型のネズミが病原菌を媒介する。もともと病原菌を持っている野生動物はいっぱいいるわけで、コウモリなどもそうです。今、自然開発は進み、人類とそれらの動物との距離が近くなり、以前より接触する機会が多くなっています。

小松 野生動物との関わりが変わ

ってしまいましたから。
秋道 森林がなくなったから、クマ、シカ、サルなどの野生動物が集落に出てくる。
小松 日本の過疎化した山村に行くと、家の中に動物が入ってこないように、人間のほうが檻のように囲われて暮らしています。その家の周辺を動物たちが徘徊している。そうしないと襲われたり食べられたりしてしまうから。働き手がいなくなっているから田畑に動物を避ける囲いを作れない。これはある意味、開発が進んだ果ての現代文明の一つの形といえましょう。都会に暮らしていると気がつかないけれど、過疎の村の住民は本当に気の毒です。
秋道 もうひとつの脅威は、大陸やオーストラリアから飛んでくる渡り鳥です。とくに水鳥類が鳥インフルエンザ菌を、その辺りのカモなどにうつす。それがさらにワトリにうつって大量に殺処分される。疫災は海を越えてやってくるけれど、空からもやってくる。また温暖化の影響によって生物

ウィズコロナ6つのメッセージ 自然と人間との共生の視点から

Message 1 **神野 恵**
天平の天然痘禍
平城京の疫病対策

Message 2 **河合 敦**
災害や感染症が明治維新にもたらした影響

Message 3 **小倉孝誠**
西洋文学にみる感染症

Message 4 **阿南 透**
コロナ禍は祭りをどう変えたか
青森ねぶた祭の中止と存続

Message 5 **久野譜也**
健康になれる都市環境の構築

Message 6 **森本幸裕**
緑の役割の再発見
ネイチャー・ポジティブにむけて

自然は多面的ではあるが統一性をもったものであり…
生命力にあふれた全体として、自然の事物と力が一体となったものである
アレクサンダー・フォン・フンボルト『KOSMOS』(1850年)序論より、前島郁雄訳

ということが、現代の鯨絵の役割を果たしているのですね。現代人は異常事態が発生したり、突拍子もないことが起こった時の全人格的な判断力が、知らず知らずのうちに激減している。自然の森に行っても、異様な音を聞きわけるとか、風の音で周囲の変化を感じるとか、そういう生の体験が今の人はあまりにも少ない。それはとても危険で、怖いことです。今回のパンデミックのような事態に遭遇した場合、ネットやメディア経由でいろいろな情報が入ってきて、自分で判断する根拠、心の中の原点みたいなものが構築されていないから、日常と違うことが起きると戸惑ってしまう。

方自体を考えることにつながると思います。
小松 現代の子供は、森に行ってもちよつとセミが鳴いているだけで、うるさいと感じるらしい。朝、鳥が鳴いていると、それで目が覚めたと文句を言う。自分の住んでいる空間の中で、いつてみれば自然よりも、周りを機械に取り囲まれて生活している。いざれ政府にコントロールされて、体は生殖器だけになって、機械に囲まれて暮らしている未来がくるのではないかというような怖さ。生身でほっぽりだされたら死んでしまう。自身自身の感覚をどれだけ磨けるかがこれから大切な課題だと思います。
秋道 もちろん自然だけではなく、音楽とか、絵画とか、あるいは朗読とか、五感を通じて入ってくる情報はいい。しかし一方で、このコロナ禍を通じて、自然との付き合い方、共生についてもっと考えるべきです。人種、男女、貧富など格差がいろいろあるけれど、差別ばかりに注目するのはなく、それを超えて繋がる人間の優しさを

もっと前面に押し出すような生き方があるはず。殺すとか、人の命を軽々しく考えすぎで、もっとその人のもっている体験や思いに、耳を傾け、触れ合うことを、今こそしていくべきです。
小松 コロナ禍については、騒ぎすぎていると思いますね。なぜなら、歴史を振り返ると、通過儀礼を乗り切った人が生き延びているからです。病気の場合はお殿様であるうが、会社の社長であるうが、貧しい人であるうが、格差なしです。もちろん予防できるかどうかという環境もあるかもしれないけれど、病気は基本的にはうつるものなのです。そういう意味では同じ、平等。しかし、今はみんな生き残らなければならなくなっている。死んでいくものは死んでいくし、生き残るものは生き残る。つい最近までそういう歴史だったのが、この百年くらいにガラッと変わってしまった。
秋道 全員が生き残る。薬で、お金で、いい病院入って治療して。
小松 相対的に長生きできるよう

になったのが、本当にいいのかわからないのですね。マイクロネシアでは、自分たちが木に登れなくなった時に、孫が木に登ってくれたら、娘や孫が畑を耕してくれると。だから二十人くらい子供がいて、一人や二人死んでも大丈夫と考える。
秋道 たしかに子供は安全保障といえるけど、少子化の日本では考えられない。今回のコロナ禍では、ワクチン接種の普及は先進国と途上国で大きな差がある。現代は人新世と言われますが、人間中心主義で地球を考えるべきでない。動物も人間も共に生きていなければ、コロナ禍は現代人の生きざまや価値観を変える処方箋になればと思いますね。

*1 永野正宏「蝦夷地における感染症対策 19世紀前半の天然痘とアイヌの間わり」『Ocean Newsletter』第486号、2020年

天平の疫病流行の背景

平 城京は日本で、はじめて本格的な京城と人々の集住をともなう中国式の都城であり、その人口は五万人とも十万人とも推算されている。律令制度は官人層を生みだし、さまざまな物資が税金や交易品として日本全国から運ばれた。また、シルクロードの終着点とも評されるように、唐、新羅、渤海、インド、ペルシャなど諸外国からも人が集まる国際都市でもあった。人口密集と活発な海外交流は、現代社会と共通するよう、感染症大流行の条件を備えていたとも言える。

『続日本紀』は天平七年（七三五）、**豌豆瘡**（俗にいう**裳瘡**）が流行し、多くの死者が出たと伝えている。『正倉院文書』に残る税の記録から推定される病没者の割合は、人口の三〜四割にのぼる。豌豆瘡や裳瘡は、天然痘を指すとみられるが、単に疫瘡と書かれている場合が多い。そのため、麻疹の可能性や、同

Message • 1

天平の天然痘禍 平城京の疫病対策

神野 恵

考古学者、奈良文化財研究所室長

▶ じんの・めぐみ 1973年大阪府生まれ。専門は考古学。平城京や寺院の発掘調査に従事し、土器・陶磁器を中心に出土遺物の研究をおこなう。著書に『平城京事典』（共著）など。



二条大路のゴミ捨て穴から出土した土器
奈良文化財研究所蔵

中には「兵部卿宅」と墨書してあるものもあり、時の兵部卿、藤原麻呂の邸宅で使用されていた土器を含むことはまちがいない。出土遺物のなかでも、土器は数量が多く、ほぼ完全な形をとどめるものも少なくない。つまり、これらの土器は壊れたために捨てられたわけではないことを意味する。当時、土器の多くは、食器として使われていた。私は、これらの土器は天然痘の蔓延を防止する目的で、食器の使い回しを避けるため、意図的に廃棄された可能性が高いと考えている。

土器の変化にみる 新しい生活様式

奈良時代の前半、平城京の貴族たちの間では園池などで舟を浮かべたり、漢詩を詠んだり、唐風の饗宴が流行した。奈良時代前半の宰相であった長屋王の邸宅跡からは、三〇センチメートルを超える大型の食器が出土している。このような大皿を用いた饗宴は、唐の貴族の間でも流行していた。奈良

時流行の可能性なども指摘されている。少なくとも見積もっても一万人は超えると思われる病死者の発掘事例はなく、病死者の死体の処理はまったくわかっていないが、発見されれば、現代科学によって正確な病名を確認することができるとも思えない。ここでは天然痘ということにしておく。

発掘調査からみえた 平城京の人々のたたかい

法会などでは、土師器皿が使い捨てにされた。現代でも神前のお供えは土師器皿を使う場面が多いが、これは使い捨てができるがゆえに、清浄な器と評価されるようになったからである。天平の天然痘禍は、コロナ禍同様、人々の衛生意識を変化させ、身近な日常品でも変化した可能性が高い。そして、その疫病に関わる知恵や経験は、日本文化の根底に確かに根付いているように思える。

病気の原因は「鬼」

二条大路のゴミ捨て穴からは、疫病の退散を願う呪符が書かれた木簡が含まれていた。九つの頭をもつ蛇に、病気の原因となる鬼を食べて下さいといった文言であるが、これとよく似た文言が、中国の医学書である『千金翼方』に書かれている。

おもしろいのは、『千金翼方』では病気の原因は「瘧鬼」と書かれているのだが、平城京から出土した木簡には、「唐鬼」と書かれてい

る点である。瘧は訓読みでは「おこり」と読み、発熱を伴う伝染病を指す。この字を、どこかで写し間違えたか、はたまた、この病気が外国から来たことを意識して、あえて「唐」としたのかは、推測の域をでない。

古代の人々は、病気の原因は、鬼や穢れだと考えていた。病気にかかった人々は、人形と呼ぶ祭祀具に、自分の穢れをうつして水に流したり、鬼を描いた土器に息を吹きかけて水に流したりした。人間は正体が見えないものに不安を覚えるらしい。古代の人々は鬼の正体を描き、可視化しようとした。それはあたかも、私たちが電子顕

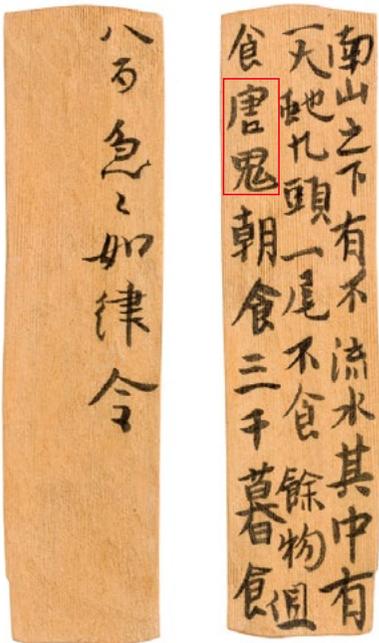
微鏡でコロナウイルスの写真をみると、少し正体がわかったような気になるのと似ている。

このような祭祀は、現代の我々にとっては「まじない」に過ぎないが、当時の人々にとっては、立派な医療行為だった。興味深いことに、鬼や穢れはうつるとも考えられていたことだ。つまり、病気の原因をどう呼ぼうとも、それらは感染するものであり、注意して避けなければならないものであった。穢れを清めるのは、酒であり、塩であった点もおもしろい。これも現代人にとってのアルコール消毒や次亜塩素酸水である。つまり、病気の原因を何と呼ぼうが、対処

時代の貴族たちが、現代の中国のように、大皿料理を箸でつぎ合ったか否かはわからないが、大皿に少量の料理を盛るとは考えにくい。必然的に食べ残しを家族や用人が食べるような場面は多かったことは想像にかたたくない。大型の食器を用いることは、感染リスクを高めたに違いない。

このような大型の食器は、奈良時代後半、つまり天然痘禍の後には、あまり出土しなくなる。この時期の平城京の役人の給食は、茶碗サイズの小型食器が使われるようになるのである。天然痘を経験した人々が、一緒に食事をする際には、個々の食器を使うことが定着したのだろう。

新型コロナウイルス感染症のパンデミック前は、地球環境問題が現代社会の最大の関心事で、使い捨ての割り箸や紙皿などは、控えるべきとの風潮が強かった。しかし、コロナ禍を経験した今、使い捨ての割り箸や紙皿が衛生的だと思ってしまう人も少なくなろう。平安時代には、人々が会食する



表

裏

二条大路のゴミ捨て穴から出土した木簡の復元品 奈良文化財研究所蔵

法は今も昔も基本的には同じなのである。

疫病は海を渡ってやってくる？

天平の天然痘は、新羅から伝わったのが通説となっている。新羅に派遣された遣新羅使の一行が日本に帰ってくる際、大使は死亡し、副使は罹患して都に入れないということを『続日本紀』が伝えているためであろう。平安時代以降の医学書や随筆などにも筑紫の釣りが新羅でもらって来たといった記述が繰り返し出てきており、中世には通説化していた可能性が高い。

天然痘に限らず、平安時代には



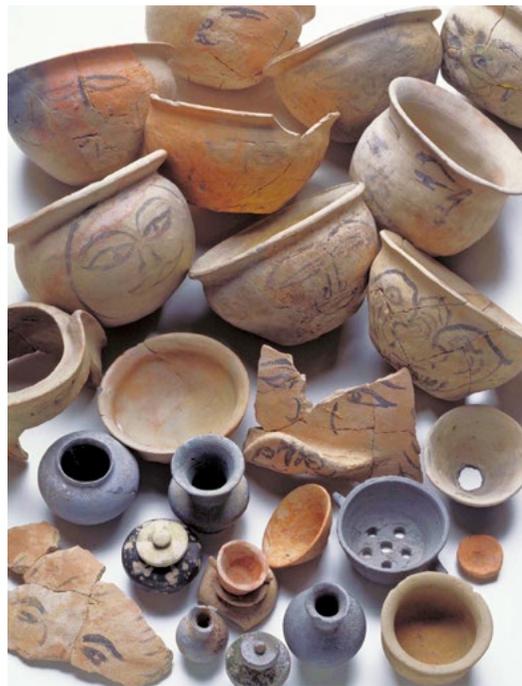
木製の人形。稀に金属製のものもあり、高貴な人用と考えられている 奈良文化研究所蔵

渤海からの使者が咳逆病（かいぎやくびょう）を持ってきたというような記述がある。この咳逆病というのは、現代でいうところのインフルエンザとみられる。その真偽はともかく、外国からの来訪者が疫病を持ってくるという意識が根強かったのは、日本が島国であることも無関係ではあるまい。

海外交流は最新の医学や技術が得られる反面、未知の疫病などもたらすリスクもあった。島国に暮らす日本列島の人々は、幾度となく、その恩恵と危険な局面を乗り越えて、生きてきたのだということをおもひ知らされる。

日本文化に根付く疫病との共生

大阪の天神祭や京都の祇園祭、奈良の春日若宮御祭など、多くの神事やお祭りには、疫病退散への願いが込められていることに鑑みても、疫病との共生が日本文化の根底に根付いていることは明らかだ。中国を除けば、日本ほど疫病の記録が正史に記録された国はない。



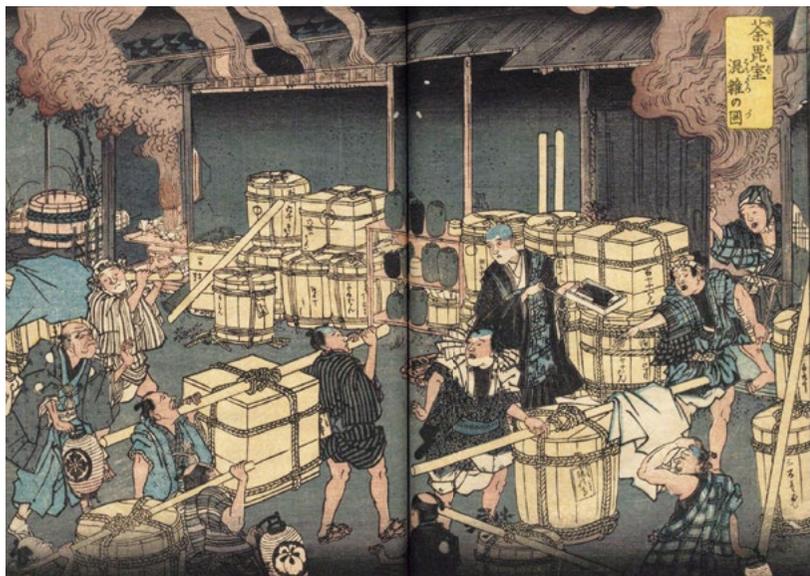
鬼の顔が描かれた土器やミニチュア土器などの祭祀具 奈良文化研究所蔵

いらしい。ここに日本人の疫病との共生方法のヒントが隠されているのではないだろうか。

そもそも、天然痘は人類が完全に撲滅に成功した唯一の感染症であると評される。しかし、永久凍土のなかに埋葬された天然痘による病死者から、病原菌がみつかったというニュースもあり、いつまた人類を脅かす存在となるかもしれない。土木工事や発掘調査などで天然痘病死者の遺体が、予想外に保存状態の良い状態で見つかる可能性もゼロとは言えない。鳥取県の青谷上寺地遺跡では弥生時代の人骨に脳が残った状態でみ

つかったこともある。過去の病原菌の完全なる撲滅と共生の線引きは、考古学の立場からすると、難しいようにも思える。

免疫は一世代のみで、次世代に伝えることができないが、記録を残し、歴史として伝えることで、次世代は備えることができるかと考えたであろう。確かに、少なくとも精神的にはある程度の心づもりができるであろう。これを私は「社会的免疫」と呼んでいる。歴史研究者としては、先人たちの思いを伝え、受け止めることで、日本の社会的免疫力の向上に寄与していきたい。



『安政箇流行記』より「茶毘室（やきば）混雑の図」錦絵 国立公文書館所蔵

安政の大地震と政権交代

明 治維新は、ペリー艦隊の来航を機に、尊王攘夷思想が高まって幕藩体制が動揺し、やがて倒幕運動によって江戸幕府が倒

れて新政府が樹立された。このように、外圧や政治運動の側面から維新を語ることが多い。そこで本稿では、少し違う観点を提示したいと思う。

安政元年（一八五四）、ペリーが再来して幕府は日米和親条約を結

Message • 2

災害や感染症が明治維新にもたらした影響

河合 敦

歴史学者・作家、多摩大学客員教授

▶かわい・あつし 1965年東京都生まれ。専門は日本史。多くの歴史書を執筆するとともに、歴史番組などメディアでも活躍。著書に『関所で読みとく日本史』（KAWADE夢新書）など。

んだが、同年十月にはロシアのプチャーチンが下田に来港し、一月三日から下田の福泉寺で開国のための日露交渉がおこなわれた。ところがその翌朝、大地震が発生したのである。安政東海地震（いわゆる南海トラフ巨大地震）だ。

駿河湾西部や甲府盆地が激震に見舞われただけでなく、中国・四国から東北にもおよぶ広域地震だった。東海道の各宿場が大きな被害を受け、とくに三島宿は全壊した。さらに翌日、またも激震（安政南海地震）が広く日本列島を襲った。この両日の地震で列島沿岸部には大津波が押しよせている。下田にも大波が到達し、港に停泊するロシア船ディアナ号も津波にもまれ、舵と船底を損傷して浸水。後日、修理のために別の港へ曳航する途中、沈没してしまった。

下田の「流出家屋は八四一軒、半壊三〇軒（計八七一軒）、無事であったのはたった四軒（北原糸子編『日本災害史』吉川弘文館）で、全戸の「九九・五パーセント」にあたる。また、人口三八五一人のうち九九人が犠牲になり、これを機に下田は衰退にむかった。

船を失ったロシア人たちは路頭に迷うが、前水戸藩主で幕府の海防参与・徳川斉昭は、「良い機会なので、ロシア人を集めて殺してしまおう」と老中首座の阿部正弘



『江戸大地震之絵図』より「安政二年江戸大地震火事場の図」錦絵
国立国会図書館蔵

九三人。大名屋敷の犠牲者は二千人を上まわり、幕臣の死者は公にされていないが、少なくとも一万人近くが亡くなったと推定される。この地震では水戸藩邸も大きな被害を受け、徳川斉昭は側近の藤田東湖と戸田忠太夫を失っている。これ以後、斉昭の活動は精彩を欠くようになった。もし二人が生きていれば安政の大獄もうまくかわし、水戸藩が藩内抗争で没落せずに済んだかもしれない。

に提言したという。ずいぶん乱暴な意見だが、震災時に政治権力が混乱のどさくさにまぎれ、残虐行為をおこなうことは少なくない。翌安政二年十月二日、今度は江戸が直下型の大地震（関東大震災と同じタイプ）に見舞われた。前掲書によれば、町方の死者は四二

地震では、品川沖に急造した台場が壊滅的な被害をうけ、江戸の防衛力が一気に低下した。また、老中の屋敷が並ぶ江戸城御曲輪内の被害も甚大だった。いまだいえば永田町界隈が壊滅したようなもの。政権をになう阿部正弘の屋敷もつぶれ、正妻がだけがをしたうえ、阿部を外へ逃がし

た側室が亡くなってしまった。老中の内藤信親（村上藩主）の屋敷も全焼した。ショックを受けたのか阿部は十月七日と八日は登城できず、その翌日、政権を佐倉藩主の堀田正睦に譲っている。震災を機に政敵の井伊直弼が阿部に圧力をかけ、それに屈したともいわれる。いずれにせよ、阿部政権は崩壊したのである。大災害時の政権交代はよく見られることだが、まもなく阿部は体調を崩し、安政四年六月に三十九歳の若さで逝去した。ストレスが阿部の死期を早めたといえるかもしれない。

幕末のコレラ流行と攘夷思想

地震で甚大な被害を受けた江戸だったが、翌安政三年八月、今度は巨大台風が襲来する。江戸城をはじめ、城下のほとんどの建物が破損。特に沿岸部は風浪被害が大きく、床上浸水が各所でおこり、永代橋、新大橋、両国橋などが破損した。斎藤月岑著『武江年表』（今井金吾校訂、ちくま学芸文庫）

によれば「近来稀なる大風雨」で、風浪が津波のようになって押しよせ、大小の舟が転覆し、「此時水中に溺死怪我人算ふべからず」という状態になった。まさに踏んだり蹴ったりだが、不幸はそれだけで終わらなかった。翌々年、今度は江戸でコレラのパンデミックが起こったのだ。通説では、長崎に入港したアメリカの軍艦ミシシッピに罹患した乗組員がおり、長崎市中で感染が広がったのがきっかけとされる。オランダ人医師のボンペラの統計によれば、人口六万の長崎で一五八三人がコレラにかかり、七六七人が亡くなったという。長崎の人々は、疫病をもたらした外国人を憎むようになった。長年唯一の国際港であった長崎においてさえ、コレラによって攘夷思想が高まったわけだから、他の地域においてはいうまでもないだろう。

る。

災厄が後押しした明治維新

ましてや一般庶民は、コレラの感染から逃れるため、神仏や迷信にすがりついていた。

斎藤月岑著『武江年表』に記されていることを意識して紹介しよう。

『日本コレラ史』（山本俊一著、東京大学出版会）によれば、病死者の埋葬が間に合わず、死体から臭気が発生、これに触れたものが感染するのではないかと医者たちは疑ったという。洋学者として有名な佐久間象山も主君（松代藩主）に対し、火葬すると死体にたまっていた病毒が外に出て、コレラを伝染させると警告。信濃国岩村田でコレラ患者の葬式をおこなった僧が全員死んだのは、遺体の臭気にあたったからだと述べている。開国主義者で開明的な象山も、このような妄説を信じていたのであ

節分のように豆をまいたり、門松を立てる家もあった。厄払いをして金銭を乞う者も現れた。誰が言い出したのか、天狗の羽うちわは疫病を払うから、形が似ている八ツ手の葉を軒につるすと良いという噂が流れ、多くの人々がその言葉

コレラ予防や治療本も続々と出版された。『安政箇労働流行記』もその一つだが、まことにいい加減な内容だ。たとえば、感染を防ぐには、常時、薄羅紗やうこん木綿（綿子）などの類いを二重に腹に巻いておけとか、とにかく果物を多く食べろという。罹患したら、熱い茶に焼酎を入れ、砂糖を少し溶かして飲めとか、座敷を閉め切って風にあたらずに、羅紗の切れや綿子に焼酎をつけて体を擦りなさいと書いてある。

幕末におけるコレラの流行は、一度では終わらなかった。文久二年（一八六二）に麻疹が大流行したが、この年再びコレラが猛威をふるい、前回（安政五年）のときに比べて病死者が何倍にも膨れ上がり、財産を失う者や一家全滅によって跡継ぎがいなくなった家は、数え切れないほどだったという。

このように幕末になると、大地震や巨大台風、伝染病が相次ぎ、こうした災厄に的確に対応できない幕府への信頼が大いに揺らぎ、人びとは新しい世の中の到来に期

大村竹次郎「虎列刺退治（コレラタイザ）」1886年刊行の錦絵
東京都公文書館所蔵



待をかけるようになったのである。外圧や政治運動の影響も大きいですが、災厄が明治維新を後押しした事実もぜひとも知ってほしいと思う。

なお、コレラは明治期にも流行を繰り返し、ようやく終息を見せたのは、大正時代になってからのことであった。ぜひコロナがそうならぬよう、全人類の叡智を結集して覆滅してほしいと願う。

西洋文学にみる感染症

小倉孝誠
 仏文学者、慶應義塾大学教授

▶おぐら・こうせい 1956年青森県生まれ。専門はフランス文学。近代小説を歴史、ジェンダー、身体、都市などを基軸に文化的に読み解く。著書に『ゾラと近代フランス』など。

はじめに

人類は常に病と闘いながら共生してきたが、人々の不安を強くかきたてる病は時代によって異なる。そして両者の関係をたどると、人類が感染症と勇敢に闘うと同時に、現代医学の立場からすればまったくの幻想や偏見にす

ぎない反応が生じていたことが分かる。とりわけ未知の病や治療法のない病にたいして、人間は常に病以上のものを読みこみ、過剰な意味づけをしてきた。医学的な症状のみならず、人間が病をどのように認識したかということも、病という現実の一部である。病をめぐるそのような文化的表象は、過去の文学作品によく示されている。

読み直される カミュの『ペスト』

コロナ禍が広がるにつれて、世界中であらためて注目され、数多くの読者を獲得したのがフランスの作家アルベール・カミュの『ペスト』（一九四七年）である。アルジェリア北部の町オランでペストが発生し、都市が封鎖されるといふ極限的な状況のなかで、一人の医師を中心に住民たちが疫病に立ち向かう姿が語られる。危機のなかで生まれる連帯や、感染の脅威にさらされながらの献身的な努力は感動的だし、それにもかかわらず死んでいく犠牲者の姿は痛

ましい。そしてカミュは行政当局の無為、権力者たちの自己保身、人々のエゴイズムもまた冷徹にえぐり出している。現代の読者はそこに、コロナ禍が引き起こしたさまざまな現象との類似を見てとり、感染症克服への希望を読みとっているのだろう。

じつは作家自身の意図としては、ペストは文字どおりの疫病というより、ナチスという悪を寓意的に表現したものだ。二十世紀において、ペストが都市全体を襲うというのは疫学的に現実性がうすい。第二次世界大戦中、ドイツ軍に国土の半分を占領されたフランスでは、多くの人々が対独レジスタンスに身を投じてナチスと闘った。終戦後まもない一九四七年において、ナチスはなまなましい記憶として人々の脳裏に刻まれていた。当時の読者がペストの背後にナチスの悪を看取したことは容易に想像がつく。他方現代では、世界中の読者がカミュの小説に、恐るべき感染症の波紋や、それと闘う人類の姿を認めているのだ。

ペストから結核へ

ペストはカミュの作品では寓意的に活用されているが、ヨーロッパの中世から近代にかけては現実にもっとも恐れられた疫病だった。



カミュ『ペスト』、原書のポケット版表紙（右）、フランスの画家ニコラ・ブッサンが描いたペスト（1631年）

電撃的に襲いかかる死の病であり、その脅威を前にして当時の医学はまったく無力だった。とりわけ十四世紀ヨーロッパ大陸全体に広がったペストは「黒死病」と呼ばれて、歴史に記録されている。都市でも田舎でも秩序が失われ、社会は崩壊の危機にさらされる。他方、疫病に冒された者はそれをしばし

ば宿命として甘受した。当時の西洋キリスト教社会は、病を人間の罪深い本性ゆえに神の意思により下された罰と見なしたからである。

デフォー作『ペストの記憶』（一七二二年）は、十七世紀ロンドンで発生したペストの記録文学として名高い。作者は劈頭からペストの拡がりを語り、発生地区と日々の死者数を新聞記事のように記していく。住民はパニックに陥り、根拠のない噂を信じ、占いに頼る。行政当局は疫病を抑えようと市民の自由を制限するが、豊かな者たちは忠告に耳を貸さずに町から逃げ出す。風聞がいたずらに不安を煽り、住民が当局の方針に不信をいだくというのは、まさにコロナ禍の現在にも通じる現象である。違いは、現代では死者の姿が不可視だということだ。

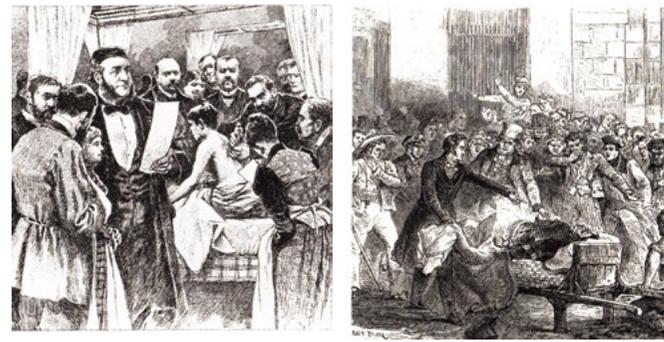
ペストに置き換わるように、十九世紀に蔓延した感染症がコレラであり、これには幕末から明治期の日本も苦しんだ。フランスはこの時代、数度にわたってコレラに見舞われているが、とりわけ一八

三二年のコレラはパリだけでも未曾有の被害をもたらした。当時は、コレラが細菌によって感染する疫病ということが分かっていないし、したがって予防や治療の手段もなかった。水汲み場に誰かが毒を投げ入れたという噂まで流布し、住民同士の暴力沙汰に発展することさえあった。

この疫病について興味深い証言を残しているのが、作家のジュール・サンドである。その回想録『わが生涯の歴史』（一八五五年）では、コレラがもたらした二つの側面が描かれている。まず、患者や死者への忌避感である。遺体には付き添う者もなく、霊柩車代わりの粗末な荷車で共同墓地に運ばれる。「とりわけ恐怖感をひきおこしたのは、荷物のように雑然と積みあげられた死体の山そのものではなく、霊柩車の後ろに身内の者や友人たちが誰もつきしたがっていないということであつた」とサンドは述べる。コレラは社会の分断をもたらし、死者は孤独だった。他方でサンドは、恐るべき病

に直面した人々がお互いの安否を確認したり、励まし合ったりする姿も描いており、読者は救われる思いがする。疫病は人々の連帯をうながし、危機を超えて新たな社会の結合を形成することにも奇与したのだ。

十九世紀中期から二十世紀半ばにかけて、世界中で猛威をふるったのが結核である。ペストやコレラと異なり、結核は突発的に襲いかかる病ではないし、短期間に多くの犠牲者を出すわけでもない。死に至るものの、ゆっくり進行する病だったから、患者にはみずから身体がこうむる変化を観察し、それを記録する余裕さえあった。こうして文学において、結核という病は他に見られないようなさまざまな表象と神話を生み出した。結核は美しさ（とりわけ女性の美しさ）を損なわない。患者の青白い肌や衰弱は、内に秘められた強い情念の反作用にほかならず、その情念とは恋の情熱や、芸術創造への情念である。ロマン主義文学においては、自由奔放でボヘミア



1832年パリを襲ったコレラ（右）と、19世紀パリの病院での結核治療。挿絵入新聞『イラストラシオン』より

的な女性たちが、生命の火を燃やし尽くした後に若くして結核で息絶える。

結核に対処する方法は、二十世紀半ばに至るまで食餌療法、転地療法、サナトリウムでの療養ぐらしかなかった。胸を病んだひとたちが暖かい南フランスで療養するさまが、こうして近代の病の風景になる。本来なら享楽と生の空間であるはずの地中海の浜辺が、同時に死に至る病に冒された人々が最後の年月を過ごす場でもあるという逆説。たとえばモーパッサンは、そこにただよう独特の退嬰的雰囲気、「初雪」などの短編小説で印象的に語っている。またサナトリウムを舞台にした小説として、『魔の山』（一九二四年）、そして日本では堀辰雄の『風立ちぬ』（一九三八年）など一連の作品をもつことになる。

エイズの衝撃

医学の進歩によって、少なくとも

も先進諸国で結核がそれほど怖い病気ではなくなっていた二十世紀末、病の風景を大きく変える恐るべき病が一九八〇年代に出現した。エイズである。それは謎めいた、スキャンダラスな病にほかならなかった。スキャンダラスというのは、欧米諸国では当初、男性同性愛者や麻薬常習者に患者が多いとされたからである。アメリカの保守層はエイズを「ゲイのペスト」と呼び、中世のペストのように神罰とさえ見なした。

フランスの作家エルヴェ・ギベールはみずからエイズに感染し、死に至るまでの自己を見つめ続けた。『ぼくの命を救ってくれなかった友へ』（一九九〇年）はその痛ましい、そして崇高なまでに美しい記録である。発病した当初の彼にとって、エイズは呪われた病だった。「アフリカミドリザルの血液を媒介にしたエイズは魔術師の病気、呪師の病気である」。ペストのように、エイズは神が下した罰であるという隠喩が作家の心に忍びこむ。

ところが、やがて作家はエイズのなかに人生と世界を見つめ直す契機を発見し、次のように書く。「エイズは確実に死にいたる長い階段だが、その一段一段は死に向かつての比類ない学習期間であった。死ぬ時間をあたえてくれ、死にたいして生きる時間をあたえてくれる病気、時間を発見し、要するに生を発見する時間をあたえてくれる病気だった」。一九八〇年代エイズは致死的だが緩慢な病であり、患者には一定の猶予期間があたえられ、その期間が患者に生の意味を問い直す時間をもたらすこうした認識は、エイズと結核を表象のレベルで近づける。

かの感染症が文学でどのように語られ、意味づけられてきたかを概観した。病はあらゆる社会と時代にみられる普遍的な現象にほかならず、誰もその脅威から逃れられない。とはいえ病をめぐる認識は時代によって変化するし、そのかぎりで文化的、社会的に構築される表象でもあって、一定の時代と社会が共有する人間観をあぶりだしてくれる。人々の反応という面で、かつて猛威をふるった疫病と現代のコロナ禍の間には類似も相違もある。コロナ禍はすでに文学の素材になっているが、その全体像が明瞭になるのはまだかなり先のことだろう。

アルプスにあったサナトリウム（1900年頃）（上）、結核菌を発見したコッホ（1843-1910）



祭りの代替イベント終了後、関係者の見守る先に花火が上がった（2021年）

Message • 4 コロナ禍は祭りをどう変えたか 青森ねぶた祭の中止と存続

阿南 透
民俗学者、江戸川大学教授

▶あなみ・とおる 1958年埼玉県生まれ。専門は民俗学。青森ねぶた祭など灯籠の祭りを中心に研究している。著書に『富山の祭り—町・人・季節輝く』（共編著）など。

針金と紙で作った人形灯籠を台車に載せ、山車に仕立てた「ねぶた」が市の中心部を運行する。幅九メートル、奥行き七メートル、高さ五メートルの大型ねぶた二十二台が運行の中心で、ねぶたの素晴らしい造形が最大の魅力である。

ねぶたは囃子の演奏とともに運行し、周囲でハネトと呼ばれる踊り子たちが跳ね回る。ハネトは衣裳をつければ誰でも自由に参加でき、多数のハネトが躍動する様子も魅力の一つである。宗教行事ではないため、ねぶたを運行する団体には、かつては町内会なども見られたが、現在では企業、公益団体が主流である。主催は青森市役所、青森商工会議所、青森観光コンベンション協会の三者からなる「青森ねぶた祭実行委員会」である。

ねぶたアート 創生プロジェクト

二〇二〇年春、新型コロナウィルス感染症の流行が始まると、実

青森ねぶた祭の魅力

新 型コロナウイルス感染症に見舞われた二〇二〇年以降、

全国で多くの祭りが中止を余儀なくされた。しかし、そもそも祭りには、疫病退散の祈願に由来するものも多い。例えば京都の祇園祭

は、貞観十一年（八六九）の疫病流行に際し、神泉苑に矛を立て、祇園社から神輿を送って災厄の除去を祈ったことを起源とするという。ところが今回は、祭りはもはや疫病退散を祈る手段とはなり得ず、祭りが引き起こす「三密」が感染拡大を招くと見なされた。この状態は現在も大きく変わらず、

祭りのない日々が続いている。しかし、こうした状況の中でも、部分的にでも祭りを続ける試みもあった。ここでは青森ねぶた祭を例に、具体的な様相を見てみたい。青森ねぶた祭は、青森県青森市で毎年八月二日から七日まで開催される、日本最大級の人出の祭りである（二〇一九年は二八五万人）。



14人のねぶた師の合作ねぶた。クラウドファンディングで実現し、代替イベントに登場した (2021年)



ねぶたアート創生プロジェクトに展示された作品の一部(2021年)

代替イベントの開催

行委員会は四月八日に早々と祭りの中止を決めた。大型ねぶたの制作に少なくとも三か月を要するため、制作が本格化する前に、観覧席の販売による損失を避けるタイミングを見極めての決定であった。中止により、「ねぶた祭を中心一年が回っている」ような青森市民にとって、喪失感是非常に大きいものであった。とくに、ねぶたの制作を請け負う「ねぶた師」が仕事の機会を失ったため、彼らを支援するクラウドファンディングが立ち上げられた。一つは市民グループが企画し、約二五〇〇万円を集めた。もう一つは主催者によるもので、ねぶた師十四人での「特別ねぶた」を合作する費用を募った。こちらは三五〇〇万円を集め、実際にねぶたを制作し展示した。このほか、二〇二二年二月には青森市が「ねぶたアート創生プロジェクト」を企画し、ねぶた師がねぶた制作の技術を使って制作した造形作品が展示された。こうして祭りはないものの、ねぶたの制作は何と継続された。

二〇二一年になると、実行委員会は一月に開催の方針を打ち出し、三月二十六日には基本方針が決定した。ここでは、青森県が三月に出したガイドラインに依拠して感染対策を決めた。すなわち、運行関係者や参加者が密にならない運行、観覧時の社会的距離の確保、各種行事における感染予防対策により、参加者、観客、関係者の安心安全の確保を目指した。ところが青森県でも感染者が増加し、五月三十一日には青森県が県内行事の主催者に「万全の感染防止対策がとれない場合、中止を含めて検討を」と求めた。これを受けて、六月十八日の実行委員会で、二年連続の中止が決まった。しかし、開催を前提にねぶたの制作が進んでいたこともあり、代替イベント『心に灯せねぶた魂』映像情報発信事業』を八月二十七日に開催することになったが、参加は二十二団体のうち九団体にと

どまった。内容は、ねぶたの制作場所でもある青い海公園の一角で、九団体とクラウドファンディングで制作した特別ねぶたの合計十台が各六分間、ハネットを入れずにねぶた本体のみで運行し、その映像を配信するというものであった。会場は無観客としたが、ねぶたの審査は例年同様に行われた。イベントの様子は青森ケーブルテレビの放送と実行委員会のサイトでライブ配信された。

もう一つの代替イベントとして「アオモリネブタハヤシマツリ」が開催された。これは八月二日から六日まで、ねぶた囃子の演奏を配信するというもので、青森ケーブルテレビの放送とインターネットで十三団体の演奏を毎日九十分間ライブ配信した。

こうして二〇二一年のねぶた運行は、ささやかではあるが一応行われた。しかし、芸術イベントのような映像が配信されたものの、ねぶたで「跳ねる」ことを楽しみにしていた青森市民にとっては、二年連続で「ねぶたのない夏」に

なった。

祭りを続ける意味

このように、「お祭り騒ぎ」のような祝祭的部分を中止した祭り、例えば山車や神輿の運行を中止して神事のみ実施した祭りは他所にも見られた。兵庫県での実施状況を調査した三隅貴史氏によれば、兵庫県でも多くの祭りが中止になったが、その多くは神社庁や地方公共団体のガイドライン、周辺の大規模祭礼の開催可否、この二つを判断基準に決定としたという。

例えば兵庫県神社庁は、二〇二〇年四月の段階で「付随する神賑行事や直来の延期・中止」に言及している。大規模祭礼としては、兵庫県加西市の北条節句祭り (二〇二〇年四月)、東京都台東区の三社祭 (同)、大阪府岸和田市の岸和田だんじり祭 (二〇二〇年九・一〇月) などの中止の動向が影響したという。こうして兵庫県でも祭り、特に山車と神輿の「自粛」が相次いだ。

一方、こうした困難にもかかわらず山車などを限定的に動かした事例もある。例えばある祭りでは、山車や屋台の巡行を自粛したが、神事の際に「神様に見てもらえるよう」山車を境内に配置し、一定程度動かしてから倉庫に戻した。また、屋台の「新調お披露目」「悪疫退散」などの名目を掲げて町内のみ運行した例もあったという。

三隅氏は、このような「戦術」を採用してまで祭りを続ける理由について、祭りの「楽しみ」を守ることと同時に、祭礼を維持するためであるという。一度やめてしまうと「やめると楽ができる」ことがわかってしまい、その後の祭り維持に差し支える恐れがある。だから祭りを中断せず、縮小してでも実施し続けることが重要だということである。

このように青森でも兵庫でも、祭りの大部分は中止を余儀なくされたものの、さまざまな工夫により部分的に実施した祭りもあった。そこでは「お祭り騒ぎ」を排除し、芸術性の高い文化活動の側面を前

面に出す、あるいは神事や疫病退散祈願などを強調する、といった方向性が見られた。芸術文化活動祈願の行為を謳うことで批判を回避し、祭りを継続させようとしたのである。

とはいうものの、祭りを実施し続けることは、金銭的にも肉体的にも負担を伴う。青森ねぶた祭も、二〇二二年の祭りに参加を表明した団体は九団体にとどまり、残りでは中止による損失のリスクを恐れて様子を見ている (『東奥日報』二〇二二年一月一日)。

こうしてみると、コロナ禍を節目として、祭りが大きく変わってしまう可能性がある。縮小、あるいは中止に至る祭りもあることだろう。短期的にはそれで良いのかもしれないが、いずれは「コロナ明け」になった時、祭りのない生活に満足できるものだろうか。一度失ってしまったものは、復活させるには非常に大きな労力を必要とする。何らかの形で祭りを存続し、末永く続けていくことを願ってやまない。

参考文献
三隅貴史「ポストコロナ社会における祭礼維持の課題」兵庫県 ポストコロナ社会における新たなライフスタイル調査研究報告書」兵庫県、2021年

小学生が願い事を書いた短冊を飾ったねぶたも登場し、祭りの復活を願った (林広海作「牽牛織女天の川」日本通運、2021年)



健康になれる都市環境の構築

久野譜也
筑波大学教授

▶くの・しんや 1962年生まれ。筑波大学スマートウェルネスシティ政策開発研究センター長。著書に『70・80・90歳の“若返り”筋トレ』(NHK出版) など。

超高齢社会とはどのような社会を目指すべきか

我

々は、二〇〇九年に超高齢社会におけるまちづくりの進むべき方向性として、「自然と健康になれるまち」と位置づけ、これを「スマート・ウェルネス・シティ＝健康都市」と名付けた。また、心身の健康だけではなく、生きがいを持った幸せな日々を送ることが国民の皆が望んでいることと定義し、「健康」という言葉も積極的に用いている。そして、多くの自治体で首長や職員とともに超高齢社会に適合したまちづくりの理想を求め、難度の高い社会実験を繰り返し行ってきた。その結果、一定数のエビデンスの蓄積がなされ、成果を得るための政策パッケージも組み立てられる段階まで来ていると感じている。

これまでの我々の経験と得られたエビデンスからみた、自治体が高齢社会によって生じる健康や社会保障における課題解決のために、政策的に成果を得るためのポ

イントは次のとおりである。

なお、これはテレワークの推奨や外出自粛がすすめられたコロナ禍において、ますます意味をもつものと思う。

①長寿化に比例した健康寿命の延伸（寝たきり者数の減少）

この「まち」に住むと自然と健康寿命が延びるまちづくりは進んでいるか

②百歳まで生きがいをもって幸せに暮らせるまちづくり

八十歳を超えても週三回以上出かけたくなるコミュニティは整備されているか

これらのポイントを上手く進めていくためには、第一に、課題の現状とそれを生じさせる原因を特定できる体制を構築することが重要である。なぜならば、現状と原因が特定できれば、それに対する対応策が具体化でき、それが機能すれば課題は解決するからである。そのために、自治体が保有している健診や医療レセプト、介護保険のデータに加えて、まちづくりに関連する多様なデータを用いるこ

とにより、最新の統計手法を駆使して健康やまちづくりの課題の見える化を行う。次いで、それを生じさせている複数の要因（ライフスタイルや都市環境、コミュニティの状況、ソーシャルキャピタルなど）の特定やそれらの要因間における因果関係などを明らかにすることが求められる。そしてさらに、それらの健康課題に対して明確な施策が打てなかった場合、三〜五年後にどの程度その課題が深刻化するのかシミュレーションを行う。これらにより、今後の政策の内容・規模などが具体化し、一定の効果が期待される施策計画の具体的な立案が容易となる。

単に国から示されたメニューを漫然と実施するのではなく、自分のまちの課題に沿った政策立案が必要なことは明白でも、現実には各自治体においてこれがほとんど効果の出るレベルで実施されていないのが現状である。

第二には、これから仕事をリタイアした後の人生は、現実的に二十年から三十年間もあり、如何に

この間を健康かつ生きがいを持った人生を送れる住民を多くするかは、自治体の重要な責務となる。しかも、この期間は、加齢により一生涯において最も健康状態が脆弱化していく期間といえる。すなわち、高齢期は、中期や前期高齢期と比較すると、居住地域で過ごす時間が圧倒的に増加するので、各自治体において「このまちで過ごす」と自然と健康になれる環境（ハードとソフト）が整備されれば、多数の高齢者における健康寿命の延伸が期待され、結果的に医療費や介護費等の抑制にもつながることも予想される。そのためは、これまでの利便さを追求してきた「まちづくり」の概念を、歩くことを基盤とした「健康都市づくり（ウォーカブルシティ）」に変えることが効果的である。

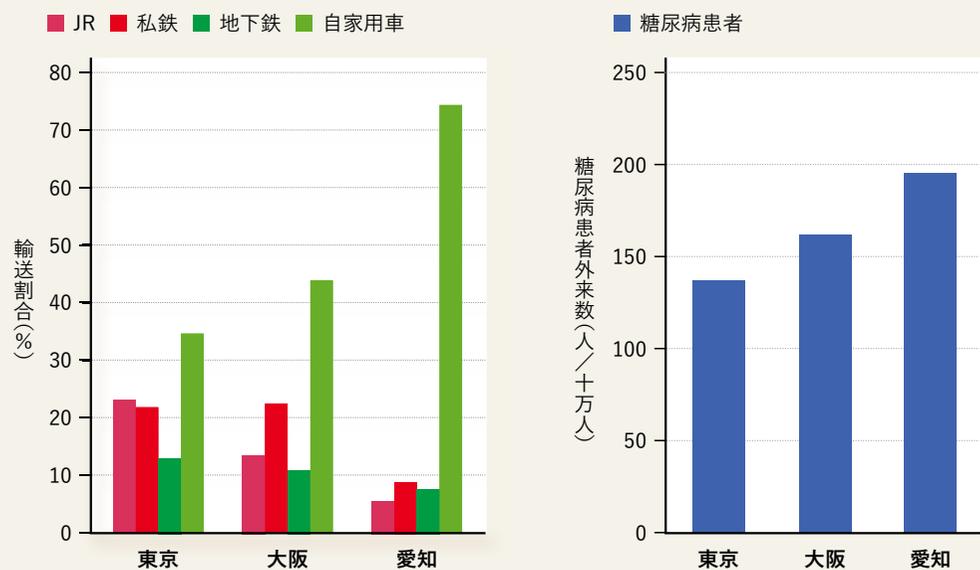
健康都市、ウォーカブルシティへの転換

図1は、東京、大阪、愛知三都府県における日常生活における自動車への依存度と糖尿病の外来者

数を比較している。東京が最も自動車への依存度が低く、大阪、愛知の順に高くなっているが、東京と愛知では二倍以上の差がある。それに対して、人口十万人当たりの糖尿病の患者数も自動車依存度と同じ順で、つまり東京が最も少なく、愛知が最も高値を示している。このことは、都市環境が生活習慣病の代表的な疾病である糖尿病の発生に一定の影響を持つことを示唆している。

さらに、興味深いのは、東京都民と愛知県民で健康リテラシーに大きな差があるということ。これまで示されていない。例えば、東京都民は必ずしも健康のために意識的に歩いているわけではなく、日常的に便利で経済的な公共交通を利用することが容易で多いため、すなわち、結果的に家や勤務地などから駅やバス停まで、および駅での乗り換えなどで歩かされてしまっているので、自然と健康が維持されている可能性が考えられる。それゆえ、健康都市とは、次のように定義できるだろう。

図1 生活習慣病の発症には個人的因子だけではなく近隣環境因子も影響する



出典：為本浩至「糖尿病患者の安定期狭心症はすぐにインペーションすべきか」『Q&Aでわかる肥満と糖尿病』8巻5号、2009年



マンハッタンの高架跡地を再開発した線形型の空中庭園ハイライン。散歩をする人で賑わう

① 仕事以外も含めて出かけたくなくなるまち環境が整備されている（生きがいにつながる活動もできる）
 ② まちを及びまちで楽しむことにより、自然と歩いてしまう
 ③ 目的地への移動として公共交通が利便に整備されており、結果的に歩いてしまう・歩かされてしまう

世界を見ても、ロンドン、パリ、ニューヨークなどの世界的大都市は、既にまちづくりの方向性をウオーカブルシティへと舵を切っている。

高齢者の外出を促進するまちづくり

今後、健幸まちづくりの整備状況の進捗スピードが、自治体間の活性度合いに大きな差異をもたらすことは必然である。八十歳、九十歳になっても生きがいを持った生活を維持するためには、それを支えてくれるコミュニティが必要であり、そのコミュニティがあり、結果的に外出回数も増え、人との会い、会話し、そして結果的に消費活動も活発化していく。そして、とくに感染症による家ごもりにも

いる。
 今後、我が国の自治体における健康政策は、人にダイレクトに関わる政策（運動・食事・睡眠・心など）のみではなく、都市そのものも健康にしていこうという発想、すなわち「健幸都市づくり」が今後の進むべき方向性といえるだろう。そして、これを実現していくためには、住民の価値観の転換も含めた総合的な政策推進なくして実現は難しいと考える【図2】。

図2 これからの健幸都市の方向性

- これからの健幸都市の方向性
 (少子超高齢社会に向けて)
- 目的：人口・経済成長を支える
 → 持続可能な社会・地域の形成
 - 視点：経済性、効率性など
 → 健康、環境、景観、幸せ、コミュニティ
 - 市街地：拡散、低密度
 → コンパクト、適切な密度
 - 交通手段：自動車
 → 徒歩、自転車、公共交通
 - 道路の役割：移動のための空間 (大量・速達)
 → 移動+交流・滞留・賑わいなどの空間
 - 道路と沿道建築物：個別・独立
 → 一体の空間として連携
 - 主体(担い手)：行政
 → 行政、企業、市民、NPO

っても、高齢者の外出促進は、歩数の増加に伴う身体活動量の確保や他との交流増につながり、身体的および社会的フレイルの予防(認知症)にも貢献することが期待される。
 それゆえ、今後の健幸都市戦略は、自治体内の健康・福祉部門、まちづくり部門、市民生活部門、スポーツ部門などが一体となって、総合的に政策が企画・実行されて

いく体制も鍵となる。これが機能しだすと、まちづくりは効果的なポピュレーションアプローチであり、自ら健康づくりをなかなか開始しない、あるいは継続できない多数の健康無関心層も、健康意識なしに歩いてしまい、生活習慣病、認知症、フレイルなどの予防効果が生まれ、その結果、社会保障費の持続性にも貢献するという望ましい循環が期待される。

国破れて山河あり

地

球環境戦略研究機関(IGES)は、復興をレスポンスII喫緊の課題解決のための対策、リカバリーII発展経路の変更にちながる政策と経済刺激策、リデザインII公正な移行を加速するための社会経済システムの大転換、と階層的に定義している。緊急対応だけでは危機の背景にある根本的な矛盾が温存されて、次のパンデミックはおろか、桁違いの災いが想定される地球温暖化や生物多様性の損失を加速しかねないからだ。

このパンデミックは日本の社会の課題の多くも露わにした。日本経済新聞は、二〇二二年元旦の一面で「成長・格差・幸福度」のいずれも世界から見劣りする日本の現状を取り上げている。これまでも「デジタル化の遅れ」「多様性の欠如」「旧態依然の教育システム」が指摘されつつも、バブル崩壊までの成功体験の夢から覚め

らずに、こうした指摘を閉却してきたことが背景にあると指摘している。

確かに日本からGAF Aのような世界的IT企業を輩出できなかったのは残念である。しかし、筆者は「人間万事塞翁が馬」の諺が好きだ。新型コロナウイルス関連の医学情報を精査して一般向けに発信されている山中伸弥教授の研究室にもその書が掲げられているを見た。また、現在の市場経済の競争に敗れても「国破れて山河あり」ではないだろうか。

日本列島は自然環境から見るとすばらしいオアシス。地殻のプレート四枚がひしめく世界一の地殻変動帯にあるため常に災害の危機にさらされているが、その結果多様な地質、地形、気候に恵まれた生物多様性ホットスポットとなっている。そこで古来、日常的には自然の恵みを楽しみながら突発的な事象は「柳に風」と受け流す知恵、自然との賢い付き合い方が育まれてきた。世界に誇る庭園文

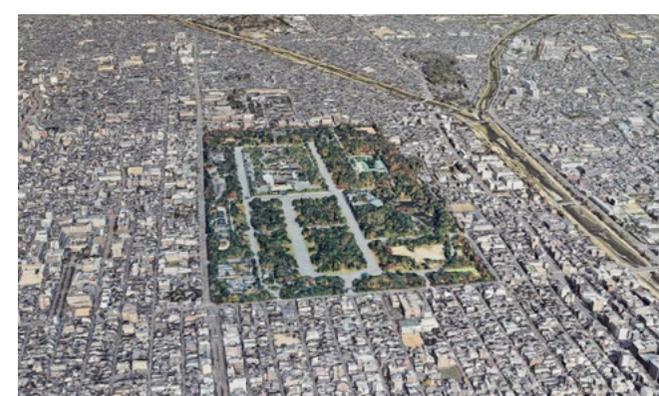
Essay • 6

緑の役割の再発見 ネイチャー・ポジティブにむけて

森本幸裕

京都大学名誉教授・(公財)京都市都市緑化協会理事長

▶ もりもと・ゆきひろ 1948年大阪府生まれ。専門は環境デザイン学・景観生態学。「生物親和都市」を提唱し、雨庭と「和の花」の普及啓発に取り組む。著書に『景観の生態史観』など。



京都市街地の緑の拠点である京都御苑。明治維新による京都没落の大攪乱からの「よりよい復興」例。健康インフラとしての現代的意義も筆者らの研究で確かめられた
 画像/Google Earth

化や美しい里の風景、地域の生物資源を活かした有形無形の、継承すべき文化が存続している。例えば、現在の京都の賑わいに多大に

貢献している祇園祭の起源は、古代の疫病対策の「御霊会」という祭事だ。疫病禍からの「よりよい復興」の古典的な事例ともいえる。

7

緑の役割の再発見 ネイチャー・ポジティブにむけて

攪乱が再生する豊かな大地

自然のダイナミズムに対する景観生態学の見方は過激である。地震も集中豪雨も、もちろんパンデミックも生物多様性と次世代の活力、そして結果としての景観を形成する原動力と考える。攪乱がない世界は死の世界。「攪乱が再生する豊かな大地」——これは私が京都大学定年を機にまとめた著書『景観の生態史観』の副題である。一時的には、または旧世代にとつては災難であっても、「攪乱体制」が景観形成の原動力となる。森林の大木の倒木が次世代の多様性と活力をもたらすメカニズムを「ギヤップダイナミクス」という。洪水氾濫は河畔林を再生する。もう少し大きな目で見ると、氷河時代という寒冷期の広域、長期に亘る大攪乱が、爬虫類の中生代から哺乳類の新生代への変化をもたらした。水田耕作を支えた里山の薪炭林や秣場^{※1}の刈敷の収穫という人為的な攪乱も、持続可能でかつ、

満鮮要素植物^{※2}と呼ばれる氷河時代以来の生物多様性を維持するメカニズムであった。

凄まじい惨禍をもたらした東日本大震災のあとの社叢学会^{※3}のシンポジウムでの、学会名誉顧問でもある文化勲章受章者トナルド・キーン氏の話には感銘を受けた。キーン氏は、未曾有の危機に日本を脱出する外国人も多い中、逆にアメリカのご自宅を処分して日本を応援するために帰化を申請中だった。「日本は必ず素晴らしい復興を遂げる」とエールを送られたのには理由があった。日本の経験した三大惨事、応仁・文明の乱、天明の大飢饉、太平洋戦争を思い起こしてほしいとのこと。なるほど、これらで亡くなった人数は東日本大震災よりも桁違いに凄まじい。でも「復旧」ではなく、新たな文化とともに蘇っていることに注目すべきだとキーン氏は言う。応仁・文明の乱後には武家、公家、禅僧の文化を融合した東山文化が生まれた。天明の大飢饉では、科学技術と公益重視を危機管理に

活かす伊能忠敬が活躍。太平洋戦争の惨事からの復興を象徴する文化の例として、キーン氏は川端康成の名を挙げられた。

千年の都と讃えられる京都の歴史的景観は、千年前のままでなく、大小の攪乱と再生の繰り返しを重ね構造となっている。碁盤の目の街路は平安京というより秀吉の都市計画の名残である。鴨長明が方丈記で記したのは彼が経験した五つの大攪乱であった。しかし、土地のポテンシャルを生かした賢い土地利用の文化など、先人の知恵が復興の基盤となっている。

直近の大攪乱といえば明治維新。京都が誇る歴史と自然のストックのセントラルパーク、京都御苑が誕生した節目の明治維新は、京都にとって没落の危機であった。東京遷都で三十五万の人口が一時は二十四万にまで減った京都の中でも、このあたりは「狐狸の棲家」とまで言われる寂れようだった。しかし、公家らが去った邸宅跡地を整備して、近代都市京都の緑の拠点が誕生した。そして現代、こ

うした緑地が人々の自然免疫系の維持に貢献する、「健康インフラ」でもあることは筆者らもエビデンスを得ている。

AI未来予測が示す分岐点

では、新型コロナ禍はどのような新時代の契機となるだろうか。コロナの熱湯に驚いて飛び出したカエルが、遙かに深刻な危機、つまり、ゆっくり昇温する地球温暖化で「ゆでガエル」となってしまう、という「ゆでガエル」警句を現実にはしてはならない。

実は数年前のAI（人工知能）研究結果が、持続可能な社会に向けた重要な方向性と、政策転換に残された時間は少ないことを示唆している。京都大学の広井良典教授らと日立製作所の研究結果が、政策提言として公表されたのは二〇一七年のこと。二〇五〇年の日本が持続可能かに焦点をあてて、政策オプションによって異なる未来を予測した研究である。

人口、財政、環境資源、雇用、格

差など定量化できる要素だけでなく、健康や幸福など主観的なものも含む一四九個の指標とそれらの因果関係をもとに作成された二万通りのシナリオ。極めて多数のシナリオ分岐点があるが、最も重要なのは「都市集中型か地方分散型か」の分岐である。このシナリオ分岐点が二〇二五〜二七年頃やってきて、財政状況に問題は残るも

の、地方分散型の方が持続可能性、格差や健康、幸福の点で優れているとされる。この分岐以降、両者は再び交わることはないという極めて重要な局面に差し掛かっていることをAIが示唆している。そこで、「よりよい復興」はコロナ禍が露わにした感染症関連の次の四つの課題対応を通じた「地域循環共生圏」へと社会をリデザイン

ンする合意形成が急がれる。

- ①野生動物とともに未知のウイロスの宝庫でもある原生的自然の保護
 - ②行き過ぎたグローバル化の修正
 - ③自然と都市地域の緩衝地帯としての里地里山の活性化
 - ④過密な都市生活環境改善
- これらは、生物多様性の損失を

反転する二〇三〇年ネイチャー・ポジティブ達成にも貢献するであろう。

※1 田畑に投入する有機物（刈敷）や草木灰、家畜飼料を収穫する草地
 ※2 最近の氷期に中国大陸東北部や朝鮮半島から日本列島にかけて分布を広げたと考えられるワレモコウやツチグリのなどの草原の植物
 ※3 鎮守の森の自然と文化とその継承をテーマとする学会



万博記念公園（吹田市）の「自立した森」。造成地の自然再生事例でもある

図1 万博記念公園で筆者らが行った次世代統合医療実証試験

都市の再生した緑ががん患者のスピリチュアルケアに貢献する



心理学的試験		
方法	評価内容	結果
FACIT-Sp	QOL, スピリチュアリティ	ウェルビーイング向上
CFS	疲労	軽減
SF-36	QOL	向上
POMS	気分	向上
STAI	不安	リラクゼーション

他の試験		
方法	評価内容	結果
NK細胞活性	免疫力	向上
コルチゾール濃度	ストレス	不明
睡眠/覚醒	サーカディアンリズム	向上

赤字=有意性が高い
 出典: Maiko Nakau et al., "Spiritual Care of Cancer Patients by Integrated Medicine in Urban Green Space," *The Journal of Science and Healing* (9-2, 2013) を元に作成。和訳は筆者

公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会
情報誌 KOSMOS——こすもす
第9号コロナ特集号
2022年3月31日発行

発行 公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会
〒538-0036 大阪市鶴見区緑地公園2番136号
TEL:06-6915-4500 FAX:06-6915-4524
URL:<https://www.expo-cosmos.or.jp/>

制作協力 株式会社ブックエンド
デザイン ごぼうデザイン事務所

©Expo'90 Foundation All rights Reserved

編集後記

鯉石に似た話ですが、「殺生石」という石が栃木県的那須岳にあり、今年3月に、まっ二つに割れたのが発見されたそうです。九尾の狐を閉じ込めたといわれるこの石は、狐の怨念が毒気になって付近を通る生き物を殺してしまうというもの。

神野先生のエッセイに書かれているとおり、奈良時代の天然痘の流行は大きく、聖武天皇が安寧を願い、国分寺と東大寺大仏の建立の詔（みことのり）を出したことは有名ですが、何かにすがり、祈る気持ちは今も変わりありません、殺生石が何かに続く前触れでないよう、人々が笑いあえる日がくることを、心の底から祈りたいと思います。

(花博記念協会S.M.)

『KOSMOS』の誌名にこめた思い

本誌のタイトルは、COSMOSではなく、あえてKOSMOSとしています。どちらも意識・心の領域をも含めた「秩序と調和の宇宙」を意味しますが、真の共生の在り方を探る本誌として、古代ギリシアの哲学者たちが自然科学を論じたときに用いたKOSMOSを使うことで、人類の本質的課題にアプローチしたいと考えています。

表紙の解説 「真紅」(しんく)

赤は紫とともに、古くから魔除けや邪気祓いの意味があるとされ、神聖な色とみなされてきた。江戸時代には疱瘡などの感染症が大流行すると、人々は赤摺りの絵や赤い玩具を部屋に飾ったり、赤や紫を身にまとして平癒を祈った。とくに疱瘡では、発疹が真っ赤だと病状が軽くすむという医学的知識と疱瘡神信仰が融合し、赤色への信心が強まったとされる。
[写真] 巖島神社回廊、朱に藤渦柄の和傘、愛媛県の伝統工芸姫てまり、福島県の郷土玩具赤べこ、ホオズキ